

智慧（宿業の内観）

一文不知の人にも

一文不知の老婆でも智慧のある人があるし、大学を出た人でも智慧のない人がある。大学の先生をしている人が、迷信にとりつかれて、子供の病気を神様に祈って治してもらおうとしたり、世にも馬鹿げた生神様にとりつかれたりするのは、みな知識があっても、智慧がないからである。一文不知の老婆でも、天を拝せず、鬼神を祭らず、現世を祈らず、悠悠業苦を背負うて、悲観せず自暴自棄せず、一道を執持してたじろがない智者もいる。

現代は最も智慧に欠けた時代である。従って最も智慧を要する時代である。現代人は、悪を行ずるに大胆である。これは智意を欠いているのである。私の主張に大胆である。智慧を失っているのである。

真理と正智

仏教の中でもいわゆる聖道門は、智慧に始まって慈悲に至らんとするのであり、淨土門は、慈悲によつて救われて智慧に至るのである。大慈悲に摂取されて信心の眼を開かれる。信心の眼は智慧の眼である。

和讃にいわく、

「智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり、

信心の智慧なかりせは、いかでか涅槃をさとらまし」と。

智慧の念仏と言ひ、信心の智慧といわれる。老婆といえども、真に念仏の人となれば、智慧の人であること、我らの常に敬服するところである。彼は信心の智慧を得た人なるが故である。

聖人は御本典の総序において、「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑を除き証を獲しむる真理なり」と仰せられた。円融至徳の嘉号とは、仏の名号のことである。六字の名号は、転悪成徳の正しい智慧であるということ、他力金剛の信樂は、除疑獲証の真理である。これを承ると、正智と真理が入れかえてあるような気がする。即ち、名号六字が真理であり、他力の信心は正智であつていいようである。それを今どうして逆にせられたのであろうか。

これについて先づ知らなければならぬことがある。一には他力の信心とは、名号の眞実功徳を機に受領したのが信心であつて、名号の外には信心の体は無いということ。二には、智慧は眞理に属するということ。智慧の所有者は、眞理そのものであること、光の所有者が太陽であると同様である。智慧は眞理なるものに属するのであるから、智慧と眞理とは同一者である。三にはそれであるから、名号を正智と言ひ、信心を眞理といつてもいいことがわかる。何となれば、名号は慧日そのものである。智慧光それ自体である。智慧を光明といわれるのは、智慧は照すものということである。我々は、自ら他を照らすものではなくて、照されて光るものなのである。だから

如来の智慧に曇りなく照らし出されて生きるということが人間精一ばいの生き方である。

智慧は照す。大悲無倦常照我と照す。然し光線の照すのは、物理的な照破であるが、智慧光の照破は物理的なものではなくて精神的なものであり、人格的なものであり、価値的なものである。随って照破されるということは、一つの転廻を意味し、転入を意味し、帰入を意味し、価値的選択を意味し、機の深信として自己の発見を意味し、智慧の獲得を意味し、自覚を意味する。随って、意識的に無意識的に、これを拒否し、真実の教法を受入れず、我執を以て自ら眼をおおふなれば認めることの出来ないのが智慧である。

信心は名号を機に受取った心である。であるから、名号と信心とはその体は一つである。名号は、真理であり又智慧である。随って、信心も智慧であり真理である。今は名号を正智といわれたから、信心を真理といわれたのである。名号が真理といわれるのは、真如法性の道理で具体化されたのが名号だからであり、正智と云はれるのは、正智とは能照の智であつて真如法性を照し出すところの正智なるが故である。その名号をそのまま受取った信心も亦、真理をはらごもりしたものであるから大信心を真理と云われ、又仏智を受領したものであるから信心の智慧といわれるのである。いづれにしても、かくの如くして、一文不知の人でも、信心決定する人は真理と正智の具体的存在である。照されるとは得ることである。

火という字がほんとうの火か

智慧は、観念ではない。色心不二（体と心）の生活である。智慧が心にあるを信心又は安心と言ひ、体に生きるを行という。安心起行は、全我に仏智名号の生きたもう具体相である。

何が故に、仏教の殆んどが現代人から捨てられたのであるか。答は簡単である。頭の仏教となつて、具体的な生活事実となつていないが故である。智慧の仏教が、観念の遊戯となり、人生の具体的な生活を率いる智慧の宗教でなくなつたからである。その罪は教役者にある。徳川の政策に利用せられて、自ら対建性そのものになりきつて、信があるうがあるまいが、御院家様と奉られ、常に大衆の上に威勢を行じ、威張ることを知つて、大地にひれ伏して正法を聞信することを第一義とせず、祖師の如く、蓮師の如く、草鞋ばきで、自行化他の為に奔走せず、一にも物、二にも物、最も精神的であるべきものが、全く唯物化されたがためである。

一言にしてつきる、「智慧が欠けていたのである」。正法の命ずるところ、祖訓の戒めたもうところの数々を無視していたのである。御冥見を恥ぢず、御冥慮を畏れず、御冥加を喜ばず、ただ名利の失はれることのみを恐れて、正しい批判を受取らず、忠言に耳をおほひ、今日一日の安逸を求めて精進しなかつたのである。世に滅びるものは皆かくの如くである。

しかし今からでもいい。目を覚まして精進しよう。一人自覚して正法の命ずるまゝに精進するならば、その人を中心にならず正法は興隆するであろう。たとえ、迫害非難攻撃、山の如く至るも何等恐るゝには当らない。それよりもなお、真に畏るべき

もののあることがわかるならば、大事は小事となり、小事が大事となる。これ即ち智慧の用きである。火という文字が恐しいのではない。火の用きが恐ろしいのである。

聖人の自証

愚禿親鸞は仏智の照破によつて生れたのである。地獄一定は聖人の御自証、ひれ伏したもう自証の大地である。これ皆仏智光明の照破によつて、内観の極、見出されたる、無明流転の真相であると共に、一切群生の内的運命の発見である。然るに、そこに発見せられるものは、単なる悪でもなく善でもなく、久遠劫来の業苦に外ならぬ。見出されるものは宿業である。善というも宿業であり、悪というも宿業である。「兎の毛羊の毛のさきにいる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらざることなし」

一切は宿業から生れる。宿業は個性である。宿業はこれを如何ともすることの出来ない不思議な力である。仏智の照し出すものはこの宿業の相である。照し出すものが仏智であるが故に、救いたもうものも仏智である。誠に仏の大悲光明の救いたもうものは宿業である。惑業苦である。私を苦しめ悩ましているものは私の宿業である。民族を苦しめているものは民族の宿業である。仏智の白熱したもうところは、この宿業である。四十八願の生起する現実の根拠は宿業である。浄土の大莊嚴の全ては願心莊嚴といわれる。その願心とは、私の宿業の全てをつゝみきつたる無限なる者の自己形成の相に外ならぬ。かくして内外明暗の具体相を生み出しつゝ、それを受取っているものは、我が宿業である。

ここにおいて宿業を知らざるものは、如来を知らず、如来を知らざるものは宿業を知らない。宿業を深信諦観するものは、智慧である。誠に仏智である。

然るに世の人がいうであろう。「そのように全てが業だ、宿業だといつていたので、一切が諦め主義になつて、消極的で、元気がなくなつてしまひはせぬか、そんな考え方では、ものが発展しない。第一青年には向かないことはないか。」と。

それは頭で考えた宿業の事のことである。今いつているのは、そんな観念的な思想思弁ではなくて、全我的自覚の智慧の内的光景である。「君に問うが、君が今男性であることは、絶体的なことでは君の意志以外のことではないか。」「それはそうだ」一番人生生活の基本となる性別がすでに君の意志決定以外なことだ。君が消極的になろうが、積極的になろうが、君は矢張り男性である。君の身長五尺四寸、それも君の意志が決定したのではない、太つたところで三十貫にはなれず、やせたところで五貫目にはならない。その外、教えあげたら際限がない。みんな君自身の宿業の所産である。精出してやればやるだけ宿業が出て来るのである。修養の本来本元の孔子様さえ、上智と下愚は移らずといつたそうだ。頭のいいのも宿業、頭の悪いのも宿業、これをどうすることも出来ない。だから学ばせるといふことも、宿業個性を明かにすることだ。

人間、頭でなら「千貫の石を持ちあげて」と考えることが出来る。然し具体的には十貫の石があがるにすぎない。頭で考えたら、自由々々と何でも出来そうだが、「かには横、蛇はくにやくにや、尺取は尺をとるこそ宿業なりけり」で、本気でやればやるだけ宿業が出る。わかつたか。

随順と超越

かくて信心の智慧は宿業を内観する。

それ故に 全ての責任を自己において見る。天の曇るも、地の動くも、生きるも死ぬるも、自らの宿業によつて受くべきを受取つていること知る。それだから彼は現実入生に随順する。随順するが故に、現実人生を超越して、無碍道を生きる。「念仏者は無碍の一道なり」である。「罪悪も業報を感じること能はず」である。不思議ではないか、宿業の体感者は、業報を感じないのである。これ然しながら智慧によるのである。頭で考えた宿業は、宿作外道の如くなるのである。眞実仏道に於ける宿業の内観は、宿業より開放して、無碍自在の生活を感ずるのである。宿業を内観して念仏するものは、宿業を横超する。宿業を超えることによつて、宿業になりきる。男は男に、女は女に、愚者は愚に、悪人は悪に、私は私になりきる。火は火をやかず、氷は氷を苦しめず、煩惱、煩惱になりきれば、煩惱は私を苦しめない。みな仏智によりて成ずる横超の道味である。

魔界外道

魔界外道がとりつくのは、宿業を知らず、仏智を持たぬが故である。病人が出来る、やれ生霊がついたのだとか、墓の向きが悪いとか、家の窓の方角が悪いとか、何とかとか言われるとすぐにふらふらする、そこへ外道がとりつく。その心が迷いはじめると、何でもそう見える。その迷心の拝むものは、名は神であろうと仏であろうと、観音であろうと、薬師であろうと、皆一切合切魔界外道である。決してほんとうの仏でも菩薩でもない。

宿業の諦観深信者は、何を聞いてもびくつかない。迷わない。我を苦しめる者は我であり、我を悩ますものも我である。逃げてもかくれても、宿業ならばのがれることは出来ない。もし宿業がないならば、九百九十九人は死んでも我一人は残るであろう。合掌して受取るであろう、我が宿業を。そこには、悪魔も外道もつけこむ余地がない。病む日には病め、死ぬる日には死ぬ、仏智は、ほんたうに私を死なせて下さる。それだから生きる日には、ほんたうに生きさせて下さる。

仏の正道に安立

夏の庭を見ると、ダリヤは紅色に、百合は白く、マクノウチは淡紫に、ザクロは赤く、金魚草は黄に、それぞれの色に美しく咲いている。それこそ「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」である。青黄赤白は、宿業個性、それが平等なるいのちによつて各々の個性のまゝに光っている。

念仏の世男も亦かくの如しである。宿業によつて各々皆差別しつゝ、平等一味の大慈悲のいのち、智慧の光に生かされてゆくのである。宿業を無視して平等を成就しようとするれば、悪平等となつて混乱がおこり、平等の世界に帰入して、一味に生かされる天地がなければ、悪差別となつて無理がおこる。宿業を無視して、形を平等にしようとするところに暴圧がある。平等即差別、差別即平等、誰も彼もあるがまゝをのば

しきつて、しかも平等の願力に生かされる、かゝる具体的な人間生活がそのまゝ宗教である。

信心の智慧のみが、宿業を内観し、それ故に自力作善の心をすてゝ、仏願力に帰入し、平等なる大悲に攝取せられて、念仏に生きるのである。かくして念仏の人は、大悲の御はからいにすべてを托する、しかるに念仏の人は、全てを宿業の出て来るまゝに生きる。自らの一生が、名もなき道ばたの小草一本であろうと、深山の奥の桜であろうと、自分自身の内より出て来るまゝに、楽しみも苦しみも素直に受けつゝ宿業のまゝに生きてゆく、そしてそれが又そのまゝ如来の智慧にはからわれて生かされる。宿業のまゝにとは自力の捨てたことであり、み光のまゝにとは他力の御はからひに生かされることである。この二つの完全なる一致こそ信心の智慧の自証である。これを二種深信というのである。是を「仏の正道に安立する」というのである。